

講演『幼児期の学ぶ力とは何か』

一乳幼児期に育つ大切なものとは一

福島大学 人間発達文化学類 教授 大宮 勇雄 先生



幼児教育の研究者として、New Zealand の幼児教育理念の基盤として実践されている Learning Story (学びの物語) について研究を深められ、日本の幼児教育について示唆を与えてくださっている大宮勇雄先生に講演をいただきました。

自分の幼児期を思い出すことができるでしょうか。心に残っている人との出会い、もの・こととのふれ合いは、いかがでしょうか。大人になった私たちは、「今を生きている幼児期の子ども(たち)」の世界をどう見つめ、どう支えていくことが大事なのでしょう、考えさせられるお話でした。

「どの子ども、どんな子ども、誇りをもって生きる権利がある」

毎日、自分らしく思い切って、楽しく、精一杯生きたいという思いを子どもも大人ももっています。アクティブ・ラーニングというのは、自分の思いを主体的に表現し、他者(友達・周りの人)とかかわり合って学び合っていくことです。ですから、自ら「～しよう」、「～したい」という【主体性】が働かないと、アクティブには学べないのです。子どもたちが、自分であることに胸を張って、チャレンジし、育つ(学んでいく)ことを守ること、それは私たち大人の役目です。

「子どもの視点で見よう」

子どもの姿・思いをどのように見えていますか。

例えば、子どもの育ちが(大人にとって)順調に見えづらいつき、行動の理由が理解・納得できないとき、否定的に見えるものです。しかしながら、子どもは、肯定的な関係の中で、育ちを保障されます。否定的に見えてしまうとき、大人の見目・心を少し変えてみることを大切にしたいものです。子どもの成長や発達を子どもの視点から見つめると、「学んでいる・育っている」ことが見えてくるものです。

「関心・熱中を育てる」

子どもは好きなことをしているときに深く学んでいます。深く学ぶと、「自分なりの理論」をもって生活をします。好奇心や探究心は、大人の常識に収まらないほど、大きく可能性・柔軟性に充ちています。「関心・熱中」は大事な学力と考えられます。知識を獲得していくことは大切ですが、生かしていくこそが意味あることです。知識は、次に学ぶための力となるものです。生きていく子どもたちにとって、学んでいく力を溜め込み、身に付けていけるように、育ち・学びの場や機会を創り出していくことが望まれます。

大宮先生からのメッセージ

子どもの学びは、「地下茎で咲く花」

